親になるための教育

２月２４日（火）に長崎女子短期大学の滝川由香里先生をお招きして、3年生を対象に「親になるための教育」を実施しました。講演では、以下のようなことを先生から教えていただきました。

①赤ちゃんを大人がきちんと世話をすることにより、赤ちゃんは希望や信頼感をもつことがきるようになり、これらが赤ちゃんの人格形成の土台になる。

②赤ちゃんの人生の根っこをつくるためには、親が赤ちゃんを抱っこしたり、赤ちゃんをありのまま愛し、家族仲良くすることなどが大切である。

③男女交際では、（交際の在り方について）相手の自己決定を尊重する前に、自らが自己決定を行うことが大切である。

④今後の交際の中で、性の自己決定、中でも赤ちゃんを産む・産まないという選択は、パートナーの心・身体・未来に関わる大切な選択である。

⑤デートＤＶや男女交際で悩んだときには、１人で悩みを抱え込まないで、親や友人、病院の医師や看護師などに相談することが大切である。

卒業を目前に控え、男女交際の在り方を再考し、親になるためには精神的に成長することが大切であるということに気付かされ、大変貴重な時間になりました。

（３学年主任　田尻　慎二）

卒業生へ贈る言葉　３学年の先生方より

卒業おめでとう。人間性を磨き、
世の中に貢献できる人間であれ！
（学年主任　3年１組　副担任　田尻 慎二）

楽しい１年間を送ることができました。
卒業しても顔を見せに来てくださいね。
（３年１組　担任　西村 雅人）

卒業、おめでとうございます。
社会貢献を目指して頑張ってください。
（３年１組　副担任　田原 孝一）

これからは、「世間」という大きな
学校の中で成長してほしい。
（３年２組　担任　蕨迫　明）

何事も一生懸命頑張ってください。
応援しています。
（３年２組　副担任　永瀬　諒）

君たちがこれからどのように成長していくか、
近況報告を楽しみにしておきます。
（３年３組　担任　永石 美香子）

「曇天に笑え！」どんなにつらく、苦しい
ことがあっても　「晴れの来ない日はない」。
（３年３組副担任　宮﨑　恵）

波高の主役は交替しても、人生の主役
はこれからだ。卒業おめでとう！
（３年３･４組　副担任　安達　健）

どんな道でも、歩けない道はない。
一歩一歩、ゆっくりゆっくり、頑張れ！
（３年４組　担任　本田 球見子）

たくましく、生きていってください。
（３年４組　副担任　丸屋 陽子）

何事にも「一生懸命」に。いや！「一所懸命」に。
自分の与えられた場所で全力投球！幸多かれと祈ります。（中村　寧）

〈校訓〉自律・積極・究理

波高通信

〈ローガン〉人間性を育み、仲間を支え、個性を磨く

第１１号　平成２７年３月１日発行

校長室より　「大志を胸に」

第３８回卒業生の皆さん、卒業おめでとう。二つのことを述べて餞の言葉とします。

一つ目は、「明るい笑顔と爽やかな挨拶」についてです。

私は、昨年の４月、期待と不安を胸にこの波佐見高校に赴任してまいりました。皆さんの明るい笑顔と爽やかな挨拶に出会ったとき、その不安は全くなくなりました。そのときの感動を私は忘れることができません。これは、皆さんが、全校集会や体育の授業の始めに行っている「オアシス運動」を通して、自分自身の内面を育ててきたのはもちろんですが、日頃から思いやりの気持ちを持って相手と接することを心がけてきたからであると思います。昨年１０月の「あなたを笑顔に」をテーマに開催した大文化祭は、全校生徒の気持ちが一つになり、実に感動的なものでした。まさに、皆さんが、相手のことを思いやりながら学校生活を送ってきた証となりました。

最近は、思いを伝える手段として、SNSを利用する人が増えてきました。しかし、便利な面がある一方で、気持ちを伝えることが困難になっているという一面があるように思います。ちょっとしたニュアンスの違いで誤解を生んだり、反応するタイミングを逃して相手との関係が悪化したりすることがあります。ここに、相手の顔を見ないコミュニケーション手段の限界があると思います。相手と顔を合わせて話す言葉は、言葉だけで機能しているわけではありません。相手の表情、声色やしぐさなど様々な要素が、大きくその意味を伝える役割を果たしています。こういう時代だからこそ、相手の目をしっかり見て、自分の思いを、自分の声で、自分の表情とともに、伝えることが重要となってきていると思います。その第一歩が明るい笑顔であり爽やかな挨拶なのです。

皆さんがこれから進む新しい環境にいるのは、知らない人ばかりでしょう。しかし、知らない人が多いということは、自分にとって新しい出会いがたくさん用意されているということでもあります。そういう人たちと、時にぶつかり合い、時に協力しあって、ともに喜び、ともに泣く中で、お互いを支え、助け合える仲間というのはつくられていきます。その中にかけがえのない、生涯の友となる人がいるかもしれません。緊張や警戒を解き、傷つくことを恐れずに心を開いてみてください。どのようにすればよいのでしょうか。決して難しくはありません。自分の方から、明るい笑顔で爽やかな挨拶をすることです。皆さん一人一人には、笑顔や挨拶のもととなる、相手を察する心、つまり、相手を思いやる心が、波佐見高校３年間で、しっかりと身についています。自信をもって進んでください。

二つ目は、「かけがえのない命」についてです。

映画監督の山田洋次は、映画「男はつらいよ」の中で、「人間は何のために生きているのか？」という問いに対して、主人公の寅次郎に次のように言わせています。「生まれて来てよかったなって、思うことが何べんかあるだろう、そのために人間生きてんじゃねえのか」　卒業生の皆さん、あなたは、世界に一人しかいません。あなたの人生は誰にも代えられない、かけがえのない人生です。あなたにはよく見えないかも知れませんが、いろいろな多くの力のおかげで、あなたが生きていることを知ってください。あなたが手にした一枚の卒業証書の中に、どんなに多くの人の祈りが込められているか、そのことを思ってください。

そして、あなたが、これから歩む人生の中で、「生まれてきてよかった」と思える瞬間を、たくさん見つけてください。そのことは、周りにいる人たちの喜びでもあるのです。

我が国では、事件や事故、自然災害により、多くの方々が命を落とされています。世界に目を向けると、常にどこかで紛争やテロ行為が起こり、罪のない多くの命が奪われています。こういう時代だからこそ、自分や他人のかけがえのない命を守ることの大切さを認識し、生きる喜びを共有できる社会の実現を目指さなければなりません。我が国、そして世界の幸せな未来は、皆さんの肩にかかっているということを自覚してください。そのためにも、皆さんには、まずは明るい笑顔と爽やかな挨拶で人と人のつながりを強め、何よりも尊くかけがえのない命を大切に、自分らしく生きていってほしいと思います。

大志を胸に、これからの人生に向かって元気に進んでいく卒業生の皆さんの輝かしい未来を願っています。

（第38回卒業証書授与式校長式辞より　野田定延）

長崎県アンサンブルコンテスト

「凛～一打一打に想いを込めて～」

１２月２１日（日）に第４１回長崎県アンサンブルコンテストが開催されました。本校からは校内予選で選ばれた「打楽器三重奏」が出場しました。

アンサンブルコンテストとは、３～８人の少人数編成で５分以内に任意の曲を演奏するものです。５分間の演奏を成功させるために、早朝や昼休み、そして放課後と使える時間は全て練習に費やしてきました。「ラプソディーⅢ－凛」という曲を演奏しましたが、３人での打楽器演奏は難しく、タイミングを合わせることや呼吸を合わせることに苦労していました。「今年も絶対金賞を狙いたい」と気合を入れてステージへ向かい、力を十分に発揮できたことで見事「金賞」を受賞することができました。

（吹奏楽部顧問　大小瀬 泉子）

私たちは諫早文化会館で行われた、長崎県アンサンブルコンテストに出場しました。九州大会出場を狙って練習を積み重ねてきたこともあり、２年連続で金賞を受賞することができました。しかし、練習のときは３人の息がそろわず苦労することがたくさんありました。本番では３人とも練習の成果を発揮できた結果、出場４０校の中で上位に入ることができました。

あと一歩というところで九州大会は逃してしまいましたが、努力したことが結果につながって本当に嬉しかったです。次は、夏の吹奏楽コンクールへ向けて部員一丸となって「金賞」目指して頑張ります。ご期待ください。

（打楽器パートリーダー　寺井　千夏）

校内ロードレース大会

「完走」を目指して！

２月６日（金）に、校内ロードレース大会が開催されました。天候にも恵まれ、全員が完走して素晴らしい大会になりました。男子１２キロ、女子８キロ。本当に走れるのか、スタート前はとても不安な生徒たちでしたが、ゴールするたびに「頑張ったよー」「完走だー」「気持ちいいー」と笑顔で話していました。

記録に挑戦した人、１０位入賞を目指した人、完走を目指した人と、それぞれが持つ目標は違いましたが、全員が最後まで諦めずに頑張り、自分との戦いを制して、充実感を味わいました。

保護者の方々には、前日の夜遅くまで、当日は早朝から、おいしい豚汁とおにぎりを提供していただき、感謝いたします。生徒は「うまかー」「きつさもふきとんだー」と、温かいご馳走をいただき、最高の笑顔を見せていました。保護者の皆さまの心も体も温まる有り難いおもてなし、本当に有り難うございました。

（保健体育科主任　本田 球見子）

上位入賞を果たした生徒

豚汁炊き出し　達成感と笑顔

２月６日（金）、冬の快晴の下、波高ロードレース大会が行われました。女子８㎞、男子１２㎞の長い距離を、波高生が駆け抜けました。今年はロードレースに絶好の日和で、肌を刺す寒風もなく、昨年の小雨混じりで冷たさが身にしみた大会とは大違いでした。出走者全員が完走し、ヘトヘトになりながらも、完走の達成感と満足の笑顔を十二分に味わうことができました。味わうといえば、もちろん豚汁です。生徒は頑張ったご褒美として、美味しい豚汁とおにぎりに舌鼓を打っていました。これは十数名のお母さん方が前日の夜８時半まで仕込みをし、翌朝も７時過ぎには準備に取りかかって作ってくださったものです。子どもたちの笑顔を見たい一心で、お忙しいのに時間を割いて、頑張られたのです。お手伝いをしていただいたお母さん、お父さん方、ご協力をいただきましたことを、本当に感謝いたします。なお、お腹がいっぱいになった波高生全員が午後から漢字検定にトライしました。波高生にとって、文武両道を実践した１日となりました。

（教務主任　安達　健）

１年インターンシップ発表会　働く意味を考える

２月１７日から３日間、様々な業種の４７事業所の協力を得て、１年生がインターンシップ（就業体験）を行いました。目的は、「社会人として必要な能力とは何か」「働くことの意義とは何か」を実際に体感し、勤労観を育むことでした。また、今回から研修発表会を予定していたので、実習前からしっかりと目標を持ち、従業員の方々と積極的にコミュニケーションを取っていました。生徒実行委員を中心とした発表会では、「園児と楽しく遊んだ」「こんなにきつい仕事だった」「このような資格・能力が必要だ」「裏ではこんな大変な作業もあった」等と、４７の班が、体験したことや学んだことを各々工夫しながら発表して、学年全体で共有することができました。研修先の事業所からは、「声が小さかった」「笑顔が硬かった」などのご指摘（ありがたいアドバイス）もありましたが、「挨拶が良かった」「積極的に働いてくれた」「元気をもらった」など、お褒めの言葉も多く、全体的に高い評価をいただきました。１年生全員が、立派な労働人になるきっかけにしてほしいと思います。

「労働が人を成長させる。どんな人間になりたいかが仕事内容を決定する」

（１学年主任　川瀬 啓典）

美術・工芸科１年陶芸教育

伝統工芸士に絵付けの技法を学ぶ

１月２７日（火）、美術・工芸科１年生を対象に４名の伝統工芸士の方々を迎え、陶芸教育（陶磁器の絵付け）を実施しました。内容は「たこ唐草文様」の呉須による下絵付けでした。生徒は当日の活動がすぐに始められるように事前準備として、磁器皿に文様の下描きを行いました。地元で活躍されている伝統工芸士の先生方から指導していただけることをとても楽しみにしていました。

実際の絵付け指導では、筆の持ち方や使い方、呉須の濃さや調整方法、磁器皿の持ち方など、本当にきめ細かなご指導をしていただきました。美術・工芸科１年生２０名は、絵を描くことやものづくりへの興味・関心が高い生徒たちで、熱心に指導してくださる先生方から、必死に学ぼうとする姿勢が見られ、時間が経つのをとても早く感じたと思います。「字を書く時の書き順があるように、絵にも描く順番がある」という伝統工芸士の方の言葉に感銘を受ける生徒もいました。

この事業は伝統的工芸品への理解を深めると同時に、高い技術を持っておられる伝統工芸士の先生方から、「生きた言葉と技術」を次の世代に伝えていくことのできる素晴らしい事業だと思います。本校も守るべき伝統を引き継ぎ、これからの時代を担っていく若者たちの育成に今後も励んで行きたいと思います。（美術科 陶芸担当　立井 匡樹）

線描きと濃み付け

絵付けを学ぶ様子

２年修学旅行　達成感と感動の旅

2月１７日（火）から３泊４日の日程で、2学年の修学旅行が実施されました。最初の２日間は長野県上田市の菅平高原でスキー研修、３日めに東京方面へ移動し、ディズニーランド、スカイツリー、浅草寺界隈で自主研修を行いました。

菅平高原は積雪１ｍ６５ｃｍ。初めて見る大量の雪に生徒は目を見張っていました。

初日の幻想的なナイタースキーを皮切りに３回のスキー研修を受ける中で、生徒たちはみるみる上達し、かなりのスピードで頂上から滑り降りてくる者もいました。それぞれのレベルで十分に達成感を得ることができ、充実した研修となりました。

東京ディズニーランドでは、半日自主研修を行いました。見学や買い物だけでなく、配布された食事券を使って、昼食・夕食も自分たちで済まさなければいけないので、。それぞれに計画を立てて過ごしました。あまりの人の多さに戸惑っている生徒やホテルまでの帰り道で迷った生徒もいましたが、事故も無く終了しました。

スカイツリーでは展望台から富士山まで望むことができ、浅草では人混みの多さの洗礼を再び受けました。最先端の施設と下町情緒という対照的なものを経験することが出来て、見聞が広まったと思います。

スキー研修の際、手首を痛めて2名の生徒が当地の病院で受診しましたが、幸い大事にはいたりませんでした。インフルエンザ等にかかる生徒もいませんでした。天気に恵まれ、全て予定通りに実施することができて、充実した修学旅行となりました。

（２学年主任　宮原 隆史）